

# 新国立競技場

6/8 建設費

## 「代案作る最後のチャンス」

### 榎氏 責任は日本の設計チームに

2020年東京五輪のメインスタジアムとなる国立競技場（東京都新宿区）の改築計画をめぐる、



会見で代案の必要性を訴える榎氏（左）と大野氏（右）。日午前、東京都渋谷区の榎総合計画事務所。

建築家の榎文彦氏が5日に都内で記者会見し、現行計画に代わる案の必要性をあらためて訴えた。榎氏は、現行計画がコストや工期の面で多くの疑問や批判にさらされていると指摘し、「こんなことは建築史上なかった」と強調。改築計画を進める文部科学省や日本スポーツ振興センター（JSC）に対し、代案を検討するよう重ねて求めた。榎氏を代表とするグループは先に、現行計画よ

りコストを削減でき、工期内での竣工も可能とする代案をまとめ、JSCに提案している。榎氏は「私たちの提案は代案の一つに過ぎない」とした上で、「JSCは現行計画がうまく行かなかった時のオプション（代案）を持っていない。責任を持ってオプションを作るべきだ。今がその最後のチャンス。日本の設計チームは能力を保持している」と主張した。会見には、榎総合計画事務所出身で建築家の大

野秀敏氏（元東大大学院教授）も同席。現行計画について、「低いキールアーチ構造の屋根を採用しているためコストや工期がかさむ。屋根の開閉装置もモックアップでの検証すらされていない。すべての問題を解決せず、前に進むつもりとしている」と批判した。

なる。これにより想定された予算内に建設費を引き下げることが可能になるとしている。代案で採用したのは、多くの実績を持つ構造形式で、施工性や信頼性が高く、工期も予定通り42カ月程度で収まるという。さらに6万人以内の恒久観客席、約2万人分の仮設観客席を設けることで計8万人規模の競技場が実現できる。

榎氏は「屋根を開閉する建築の事例はあるが、構造形式をきちんと検証した上で実現している。（現行計画は）屋根の開閉や芝生の育成などをしっかりと検証しておらず、やってみないと分からないという状況だ」と指摘。「ラストチャンス

の時期だ。全力を挙げて代案を作らなければいけない。コンペに勝ったザハ・ハジドはデザインの監修者であり、責任は日本の設計チームにある。真剣に話し合っほしい」と強く訴えた。